

## 平成 20 年度グループ・プロジェクト研究計画書

(リガナ) 代表者氏名	(ミズオカ タカコ) 水岡隆子	研究科 センター等	知識科学研究科
		研究室名	伊藤研究室
研究課題	先住民の伝統的知識の今日的継承および創造的活性化		
研究目的	<p>本研究は先住民の伝統的知識 (indigenous knowledge) の今日的継承および創造的活性化を、日本 (アイヌ) とニュージーランド (マオリ) の事例から、調査研究によって明らかにすることを目的としている。先住民の研究者・実践者の協力を仰ぎ、また、共同調査の形をとることにより、比較の視点を保持しつつ、先住民の伝統的知識の今日的継承、および伝統的知識のさらなる活性化についての諸課題を探ろうとするものである。</p>		
研究方法	<p>まず、マオリとアイヌの現状について基礎文献等を渉猟し、先住民の知識の今日的継承の現状についての背景知識を把握する。その上で、</p> <p>(1) セレクトされたメンバー 4 名および指導教員は、8 月に来日するマオリの研究者・実践者とともに (マオリの研究者・実践者との共同調査研究という形をとりながら) 北海道沙流郡二風谷を視察・調査する。二風谷では、知識伝承の実践者である貝沢氏にレクチャーを依頼し、議論を行う。さらにマオリの研究者らと共に、アイヌの伝承者の方々に聞き取りを行う。</p> <p>(2) その後、二風谷での視察・調査内容を踏まえて、その視察報告会を本学にて行う。報告会では、メンバーのほか、マオリの研究者・実践者にも加わっていただき、意見交換を行う。</p> <p>プロジェクト遂行にあたっては、伝統的知識の今日的継承および創造的活性化を、観光・教育・メディアという 3 つの視角を中心として、議論を重ねていく。具体的には、(文化を売り物にしていると批判されつつも) 観光によって糧を得ながら知識を継承するしたたかさ・柔軟性、マオリの教育機関やアイヌ語教室といった今日的な学び場の創出およびそれらを通じての知識継承、メディア (テレビやラジオ、インターネット) を通じてなされる知識継承および民族アイデンティティの想像 / 創造などが議論の軸となる。さらに、先住民に関する知識人類学研究を専門とする伊藤准教授には、指導を仰ぐのみならず、先住民の方々との橋渡し役および視察のアドバイザーとして参画いただく。</p>		
研究の特色・ 意義	<p>本研究は、</p> <p>(1) 先住民みずからが、伝統的知識の今日的継承および創造的活性化への取り組みを行っている事例を元にその現状を把握し、課題を見いだすこと</p> <p>(2) 日本とニュージーランドという 2 国における先住民の置かれた現状についての、国際的な比較の視野を有すること</p> <p>(3) 中国少数民族の留学生メンバーを含むグループワーク自体が多文化の協働であること、また、中国少数民族の事例を重ねることにより、更なる比較の視野が展望しうることに特徴がある。</p>		
期待される 成果	<p>本プロジェクトは、マオリの研究者・実践者と共同調査という形をとり、また、アイヌの知識伝承者の協力を仰ぎつつ、調査を進めるものである。このことは、本グループワークのメンバーだけでなく、マオリの研究者・実践者にもメンバーに準ずる形で参画していただき、協働することを意味している。先住民の方々と協働で行われるこのプロジェクト</p>		

	<p>の遂行自体が、知識を共有・共創するためのコミュニケーション能力を高め、多角的な視点の獲得に結実するものであると考える。こうしたプロジェクト遂行における知識の共有・共創の側面も、伝統的知識の今日的継承および活性化という中心課題の考察とあわせて、報告する（報告書を作成する）。さらに、本プロジェクトの成果を北陸人類学研究会その他で口頭発表することも視野に入れる。</p>
備考	<p>指導教員：伊藤泰信准教授  メンバー：水岡隆子（知識科学研究科 M2）、大戸朋子（知識科学研究科 M2）、  栗本崇史（知識科学研究科 M1）、濱寿恵（知識科学研究科 M1）、  娜仁（知識科学研究科 M1:モンゴル族）、  道合裕基（金沢大学大学院人間社会環境研究科 M1）</p>